宮城の地域資源探訪

サン・ファン・バウティスタ号

●慶長遣欧使節とサン・ファン・バウティスタ号

ポルトガル船によって種子島に鉄砲が伝えられた 16 世紀半ば以降、国内にはヨーロッパ文明が広まり、キリスト教の布教や諸外国との貿易が急速に進展しました。

伊達政宗は、外国貿易がもたらす利益と文明を藩内に導入することで領国強化を図ろうと考え、スペイン領であったメキシコとの貿易に関する通商交渉を主な目的とする外交使節（「慶長遣欧使節」）をスペイン・ローマへ派遣することとしました。

1613（慶長 18）年、当時世界最高とされたスペインの造船技術を導入して慶長遣欧使節のために建造された“サン・ファン・バウティスタ号”は、牡鹿半島の月浦（石巻市）を出帆してメキシコに向い、難航海の末、約 3 カ月後にメキシコのアカプルコに到着しました。この航海は、日本船による初めての太平洋横断となりました。

サン・ファン・バウティスタ号は、慶長遣欧使節がメキシコからスペイン艦隊に乗船しスペイン・ローマを訪問している間に一旦日本へ戻り、その後、再び太平洋を横断して支倉常長らを乗せて帰国の途につきました。しかし、途中寄港したフィリピンで、スペイン艦隊によって買収され、その後の消息は不明となっています。

【　コ　ラ　ム　】

～慶長遣欧使節～

1613（慶長 18）年、伊達政宗が貿易交渉などのために、家臣の支倉常長ら一行をスペイン・ローマに派遣した外交使節のことで、慶長年間に派遣されたことから、慶長遣欧使節と呼ばれています。

日本初のヨーロッパへの使節は、1587（天正 10）年に九州の大友宗麟らがローマに派遣した天正遣欧使節とされています。しかし、同使節が宗教上の親善を目的とした少年使節であったのに対し、慶長遣欧使節は、地方の一大名が事実上国を代表する形でヨーロッパとの経済交渉を推進しようとした日本初の外交使節として歴史的意義が高く評価されています。

ただし、スペインの貿易政策に加え、幕府のキリスト教弾圧等が現地に伝わっていたことなどから、目的を遂げることなく帰国を余儀なくされたと伝えられています。

※　慶長遣欧使節やサン・ファン・バウティスタ号の航海等に関する資料は、江戸幕府や仙台藩により隠滅が図られたことなどから国内にはほとんど残されておらず、現在残されている記録の大半はヨーロッパやメキシコに保管されていたものとなっています。

●サン・ファン・バウティスタ号の復元

慶長遣欧使節の月浦出帆から 380 年目にあたる 1993（平成 5）年、江戸時代に自前の船で太平洋横断を果たした仙台藩の開拓精神を学び、地域活性化の大きな契機とすることを目的に、県内の政財官の代表らで組織した財団法人慶長遣欧使節船協会により、サン・ファン・バウティスタ号は復元されました。

当時の設計図もなく関係する資料も乏しい中、復元にあたっては、「伊達治家記録（だてじけきろく）」に残されていた寸法やスペイン等に保管されていた当時の絵画などを参考に、全て木造とする方法がとられました。復元に必要な木材 2,239 ㎥（50 坪の住宅約 64 棟分に相当）につ

写真提供：宮城県観光課

いても、そのほとんどは地元の石巻市（牡鹿半島）と南三陸町で伐採したものが使用されました。

船大工の高齢化が進む中、復元作業には40名以上のベテラン船大工が動員され、伝統を受継いだ高度な木造船の建造技術が石巻市の造船所に結集されました。建造中の見学者も20万人を超えるなど、大航海時代のロマンをかき立てる大型木造船の復元は、全国的にも大きな話題となりました。

復元されたサン・ファン・バウティスタ号は、上層の遮浪甲板、中層の上甲板と下層の船艙の3層構造となっており、実際に乗船することができるように展示されています。船内では、船長室やかまどなどのほか、帆を縫う水夫の様子など、航海中の生活の再現を見学することができます。また、船の守護神とされる船首像には、伊達政宗が好んだとされる「阿吽（あうん）の龍」が付けられ、船尾には伊達家の紋章の九曜紋（くようもん）が描かれており、当時の仙台藩の威厳を感じさせるものとなっています。

【コラム】

～船名の由来～

仙台藩の史料である伊達治家記録によれば、慶長遣欧使節船については「黒船」の記述と主な寸法が残されているだけで、船名に関する記載はなく、藩による命名の有無等についても明らかにはなっていません。

スペイン側の資料（メキシコ総督からスペイン王に宛てた書簡）に記されている船名のサン・ファン・バウティスタ（Sant Juan Bautista）は、キリストの先駆者である洗礼者聖ヨハネ（St. John The Baptist）の意とされ、船の建造に携わったスペイン人ビスカイノ一行と伊達政宗の出会いの日が、聖ヨハネの祭日に当たっていたことから命名されたと考えられています。

※伊達治家記録：初代藩主伊達政宗の父輝宗から第13代藩主慶邦まで、約350年間に及ぶ歴代の事跡を記録した伊達家の正史（全696冊）で、第4代藩主綱村によって編纂が開始されました。サン・ファン・バウティスタ号であろうと推測される「黒船」という記述が残されており、その大きさは船幅5間半（約11m）、船長18間（約34m）、帆柱16間3尺（約32m）、弥帆柱（やほばしら）9間1尺5寸（約18m）であったとされています。これらの寸法は復元にあたり該当部分に採用されました。

●慶長使節船ミュージアム

復元されたサン・ファン・バウティスタ号は当初、石巻漁港に仮係留・一般公開されましたが、1996（平成8）年に石巻市渡波に新設された宮城県慶長使節船ミュージアム（愛称「サン・ファン館」）の専用ドックに本係留・展示されました。

サン・ファン・バウティスタ号を抱くように扇形に作られたサン・ファン館は、帆船の歴史・文化や慶長遣欧使節などの情報発信拠点であるとともに地域の観光拠点となっています。復元船の進水日を記念したサン・ファン祭り（毎年5月）をはじめ、各種イベントの開催等を通じて地域の文化・観光を牽引しているほか、航海を体感できるシミュレーターなどが設置され、帆船の知識を楽しく学べる施設としても人気を博しています。

サン・ファン・バウティスタ号は、約400年前の高度な造船技術を現代に伝え、先人の偉業を讃える文化遺産として市民や観光客など多くの人々に親しまれています。この貴重な木造船サン・ファン・バウティスタ号が、今後も長期間に渡り保存され、失われつつある木造船の文化や船大工技術の伝承に寄与するとともに、地域文化の発信や観光振興など、地域の賑わいに貢献していくことが期待されています。

資料：仙台市史　(財)慶長遣欧使節船協会ＨＰ
　　仙台市博物館ＨＰ　ほか

写真提供：宮城県観光課